

「静域のふち」

—初稿—

2025/02/02

米俵

へ人物表へ

ユイカ

(6) ↓ (16)

禁域へ入り込む少女

少女A

少女B

紳士

男

1. 広場(昼)

活気に溢れ、大勢の子どもたちが走り回っている。

ユイカ(6)、少し離れた場所で手にしたシャボン玉の液にストローを浸す。

ゆっくりと息を吐く。

透明な玉がいくつも空へ浮かび上がる。

広場の隅には、古びた高いフェンス。その向こう側には、見事なイチヨウの並木道が続いている。道は、鮮やかな黄色い葉で埋め尽くされている。

怪し気な程に光り輝く並木道。

風に流され、シャボン玉がフェンスを越え、イチヨウ並木へと吸い込まれていく。

ユイカ、その行方を目で追う。

黄金の光に触れたシャボン玉が、ガラスが割れるように粉々に碎ける。

碎けた破片は、消えることなく、光る塵となってイチヨウの葉に降り注ぐ。

ユイカ、目を見開く。

その瞳に、黄金の光が映る。

ユイカ、吸い寄せられるように、一步フェンスに近づく。

更にもう一步フェンスへ歩み寄る。

不意に後ろから誰かに手首をつかまれ、引き戻される。

ユイカ、身体が大きくのけぞる。驚いて振り向く。

そこに立っている少女A。

少女A、必死の形相で、ユイカの手をつかんでいる。そして、大きく一度だけ首を振る。

ユイカ、不思議そうに少女Aを見つめる。

少女A、ユイカの手を乱暴に放し、何かに怯えるように、後ずさりする。

そのまま、子どもたちの喧騒の中へと走り去っていく。

2. 広場（夕）

空は薄暗く沈み始め、人影がまばらになった広場。遠くで、街の喧騒が低く響いている。絶え間ない車の走行音、誰かの呼び声、どこかの建物の空調音など。それらが混ざり合い、夕闇の空気に重く溶け込んでいる。

ユイカ、フェンスの前に一人でたたずんでいる。フェンスの向こう側だけは夕日に照らされたように、一層鮮やかな黄金色を放っている。

その光は、浸食するようにユイカの足元まで伸びている。

ユイカ、フェンスに沿って歩き出す。

歩いていると、金網が不自然にめくれ、子ども一人が通れる程の穴を見つける。

その穴から、黄色く輝く葉が数枚、こちら側の地面にこぼれ出している。

ユイカ、恐る恐るしゃがみ込み、穴を見つめる。

ユイカの足元を黄金の光が照らす。

ユイカ、自分の薄汚れたスニーカーをじっと見つめる。

ゆっくりと靴ひもに手をかけ、丁寧に蝶結びをほどこく。

そして、這いつくばる様にして、頭と肩を穴へ入れる。片方ずつ、重い靴を脱ぎ捨てる。

アスファルトの上に無造作に転がるスニーカー。

ユイカ、穴をくぐり抜ける。

3. イチヨウの並木道（夕）

ユイカ、ゆっくりと立ち上がる。足元は一面、黄金の絨毯。聞こえていた街の喧騒も消失する。

ユイカ、柔らかな感触を確かめるように足踏みをする。自分の足裏が、乾いた葉と擦れ合う音だけが、異様に大きく響く。

ユイカ、自分の様子を見ている黒服の紳士に気付く。

紳士、奥へ誘導する様な仕草。

ユイカ、続く並木道を見つめ歩き出す。

一度、後ろを振り向くが、広場からは見えていないようで、ユイカの方を見る様子もなく、人が通り過ぎていく。

奥へ進んでいくユイカ。黄金の光に背を押されるように、その影が前へ、前へと長く伸びる。

先を見つめると、木の陰から、同じような影が伸びている事に気付く。

ユイカ、走って駆け寄る。

少女Bが、満面の笑みで顔をだす。

二人は見つめ合い、示し合わせたように同時に吹き出す。

少女Bが、ひらりと蝶のように舞い、ユイカの手をさらう。

二人はスキップを踏み、手を取り合ってくるくと回転する。

そして、そのまま踊り始める。

二人の動きに合わせて、舞い上がる黄金の葉。

地面では、二人の影が、まるで生き物のように複雑に絡み合い、一つに溶け合っていく。

そのうち、溶け合った影の縁から、黒い粒子がぼろぼろと崩れ落ち、重力に逆らうように宙へと舞い上がる。

それは舞い散る黄金の葉に混じり、空の光の中に吸い込まれていく。

影が削り取られ、薄くなっていく。

それでも二人は、恍惚とした表情で笑い、踊り続ける。

やがて、二人は踊り疲れ、黄金の絨毯の上に倒れ込む。

ユイカ、少女Bの温かな肩に頬を寄せ、瞼を閉じる。イチョウ並木は、輝いているが、二人の影は、もう一欠片も残っていない。

× × ×

ユイカ、ゆっくりと目を開ける。

隣に感じていた少女Bの温もりがないことに気付き、飛び起きる。

隣にいたはずの少女Bの姿はなく、あるのは、彼女の体重で少し沈んだイチョウの葉があるだけ。

ユイカ、必死の形相で立ち上がり、少女Bの名を呼ぶように、口を大きく開けて、走り出す。

ユイカ、前を見ずに走っていたため、何かにぶつかる。

顔を上げると、そこには案内人の紳士が、無表情で立っている。

ユイカ、紳士の服を掴み、少女Bが消えた方向を指差して激しく訴えかける。

紳士、表情ひとつ変えない。彼はただ、ゆっくりと、左右に首を振る。

ユイカ、紳士を突き飛ばそうとするが、彼の身体は岩のように動かず、逆に自分がしりもちをつく。

紳士は、ユイカに背を向けて歩いていく。ふと、並木道の奥に目を向けると、影のない子供たちの群れが、光の中に溶け込みながら、意志を失った人形のように踊り続けているのが見える。

急に怖くなり、自分が進んできた道を必死に戻る。裸足の足に、黄金の葉がまとわりつき、走りを邪魔する。

ようやく、フェンスが見えてくる。すがりつくようにフェンスに手をつき、穴を探す。穴を見つけ、覗く。

穴の向こうには、灰色の地面と、自分が脱ぎ捨てたスニーカーが転がっている。

ユイカ、安心した表情。穴に手をかけ、向こう側へ這い出そうとする。しかし、ユイカの身体がフェンスを通り抜けられない。さっきまでスムーズに通れたはずの穴に、肩が、胸

4. 道(夜)

が、つかえて動かない。

ユイカ(16)、自分の手足を見る。

手足は長く、節くれ立ち、子供特有の丸みが消えて大人の女の骨格へと変貌している。

ユイカ、フェンスの穴を大きくしようとする。

ユイカの爪先がぼろぼろになっていく。

何人かの通行人がフェンスの前を通り過ぎる。

ユイカが気付いてもらおうとするが、届かない。

ユイカ、うなだれたまま、イチョウの木へ戻る。

奥の道へ目をやる。

ユイカが奥の道を見つめると、視界が歪み始める。

足元の黄金の絨毯が、じわじわと色を失い、硬く、冷たいアスファルトへと変質していく。

整然と並んでいたイチョウの木々は、次第にうごめき、等間隔に並ぶ若い少女たちの姿へと形を変えていく。少女たちは、スマホの青白い光で顔を照らしながら、気だるそうに立っている。

さつきまで降っていた黄金の葉は、街のネオンを反射する汚れた雨粒や、踏みにじられたゴミへと姿を変える。

ユイカ、その中に立ち尽くす。

確認するように、ぼろぼろになっている自分のネイルを見つめる。

そこへ一人の男が近づく。

ユイカ、男の顔を見るが、その場から動かない。

男がスマホ画面を見せる。

ユイカ、画面を覗き込み、一瞬、悩んだような表情。しかし、男が催促するように顎で先を指す。

ユイカは男の後ろをついていく。

遠ざかるユイカの後ろ姿、身体つきは女性だが、歩き方はまだ幼い。

(おわり)